

原著論文

「やりたいこと」に基づく大学生の進路選択 (2)

— 促進的記号としての就職活動 —

Career decision-making of university students as materialization

of their "Yaritaikoto" (2)

Job hunting served as "Promoter Sign"

松浦美晴¹⁾

Miharu Matsuura

キーワード: 就職活動, 促進的記号, 時間的態度, 個人志向性, 社会志向性

Key Words: Job hunting, promoter sign, time attitude, individual orientedness, social orientedness

1 本研究の目的

松浦(2009)は, 大学生の「やりたいこと」に基づく進路選択について論じた。そこで重要な概念と考えられたのが溝上(2004)の提示した「インサイド・アウト」である。これは, やりたいことを職業世界で実現しようとする若者の生き方を指す。溝上は, インサイド・アウトの生き方を選ぶならば, 自ら行動することで現実世界と触れ合い, やりたいことに修正を加えながら実現可能な進路を作り出してゆくことが必要だとした。しかしながら溝上は, 進路選択を前にした大学生に行動のドライブ, すなわち動因を与えるための具体的な対策を提示しなかった。この具体的な対策については, サトウ(2009)が有用な示唆となると考えられる。

サトウから引用する。

大学1年生の入学した年の4月は就職態勢の身体を作るような時ではない。たとえ, 半年が過ぎ, 後期になったとしても, 事情は変わらない。相変わらず就職(活動)は身近なものではなく, 入学から6ヶ月が過ぎていたとしても, 大学生活をする身体にとっては, 就職活動についての時が立ち上がっていないに等しい。まだいいや, ずっと先のことだし, という感じであり, その意味で, 入学からの6ヶ月間というものはいずれ就職活動をする身体にとって一瞬であり永遠である。ところが, それから2年経ち, 3年生の10月になると事情は一変する。促進的記号(Promoter Sign)としての就職活動が立ち上がり, 何

¹⁾ 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

月までに情報収集，何月からは会社訪問，のように刻まれた時が立ち上がるのである。「この6ヶ月間が勝負！」と思う学生がいるなら，まさに，クロックタイムとしての6ヶ月の過ごし方が問題となり，それは大学1年生の最初の半年とは—就職活動に関しては—全く異なる時の過ごし方となる。＜中略＞まさに刻まれた時，クロックタイムの発生が，人びとの生活に大きな影響を与えていたといえる。＜p.187-188＞

この文中に登場する2つの概念「クロックタイム」「促進的記号」とは，次のように説明されている。まず，クロックタイムとは，サトウにおいて「時計で測れる(計測可能な)時間」という意味で用いられている。

もう一方の促進的記号(Promoter Sign)は，もともとは Valsiner(2007)が提示した概念である。これは，未来における意味構造の可変範囲を導く特定の抽象的な記号であり，個人的な価値志向として深く内面化されて機能する。サトウ(2009)は，「促進的記号が立ち上がる」という現象について，「普通の結婚」という促進的記号を例として次のように説明している。

ところが，結婚の場合には，物心ついた時には，結婚ということを知ってしまっている。女子であれば，「将来はお嫁さんになる！」くらいのことを言わずに育った人は皆無であろう。

したがって，「結婚というシステムに驚いた！私もやってみよう！」ということはほぼありえない。では，結婚が記号として発生するというのはどういうことか。それは，具体的な行為が結婚へと収束するガイドが立ち現れることである。＜中略＞その当時(80年代)において，普通の結婚とは20歳代前半までに男女とも初婚とする結婚であり，その後は専業主婦になることであった。

結婚をする，ではなくて，普通の結婚をする，というようなことが自身の課題として立ち上がる時に何が起きているのか。それは，結婚を現実的な選択肢として考えるということだけでなく，あらゆる行為が「普通の結婚」へと向かっていくことである。これがヴァルシナー(2007)がいうところの促進的記号(Promoter Sign)である。＜p.96-97＞

就職活動という促進的記号も同様であり，大学卒業までに就職先を決定しなければならないことをほとんどの大学生が知っている。しかし，「何月までに情報収集，何月からは会社訪問」という一定の幅に絞られた行為が就職に向かって収束してゆくのは，大学3年生の10月に就職活動という促進的記号が立ち上がってからとなるのである。

本研究は，大学4年生における，促進的記号としての就職活動の様相を調査する。調査にあたり，対象とする大学生にとってのクロックタイムの発生を反映する概念として，「時間的態度」を，促進的記号の内面化を反映する概念として「個人志向性・社会志向性」を取り上げることにする。

時間的態度とは，「時間が関与する場面における態度傾向や心構えのようなものの総称」(甲村，1996)である。甲村は，大学生を対象に時間的態度についての調査を行い，因子分析により4つの因子を抽出した。そのうちの2つは「時間不安」因子と「時間活用性」因子である。時間不安因子は，「焦りを感じやすい方である」「過ぎてしまったことをいつまでもよくよく考えることが多い」「時間が経つのが気になるほうである」「毎日が時間に追いかけているようだ」

「将来のことについていろいろ気になることが多い」「何をするにもせっかちである」などの項目を含み、時間経過に対する不安や焦りのような心情に関するものとされた。時間活用性因子は、「仕事をし終わるのは、いつも期限ギリギリである」「約束時間には厳格な方である」「仕事にかかるまでに多くの時間を費やしてしまう」「スケジュールに従って、敏速かつ能率的に行動する」「締め切りには必ず間に合わせるようにする」などの項目を含み、時間厳守といった態度や仕事の能率などに関するものとされた。また、時間不安については、Winnubst(1988)が、Western Time Attitude Scale (WTAS)を作成し、因子分析から、「十分な時間がないときはパニックになる(I get almost panicky when I don't have enough time.)」「自分はたいいていの人と比べて時間的に切迫しているように思える(I seem to be more pressed for time than most people.)」「時間がとても早く過ぎ去ることについて思い悩んでしまう(It bothers me to think how fast time goes.)」の3つの項目に負荷する時間不安因子を見出した。これらから、本研究では、時間的態度のうち時間不安と時間活用性を、クロックタイムの発生を反映するものと考え、調査の対象とすることにした。

個人志向性・社会志向性は、伊藤(1997)により定義された概念である。定義によれば、個人志向性は「自他の差異性を強調する方向に働き、個性や独自性を尊重しながら、自分の信念に従って我が道をいく態度として顕現する。ただし、場合によってはエゴイズムや自己顕示、強度のナルシズムという否定的な態度にもつながりうる」とされ、社会志向性は「自と他の共存への志向を意味し、他者との調和的共存や社会適応・社会貢献としてあらわれる。しかしその反面で、他者への追従や関係の中への埋没という現象をもたらす場合も考えられる。」とされる。サトウ(2009)のいう「大学3年生の10月に立ち上がる促進的記号としての就職活動」の内面化は、上記定義の社会志向性の表れと考えられる。そこで本研究では、個人志向性・社会志向性を調査の対象とすることにした。

甲村(1996)、伊藤(1997)の実証的研究は、それぞれ時間的態度、個人志向性・社会志向性をリカート尺度による評定質問紙を用いて測定した。しかし、本研究では評定尺度を用いず、自由連想と自由記述からそれらをとらえることにした。それは次の理由による。評定質問紙へ回答するとき、対象者は自らの内的状態を提示された項目の枠組みにそって意識に上らせ組織化・構造化し作り出した反応を表出する。その枠組みは、対象者自身ではなく研究者によって作られたものである。それとは異なり、自由記述を求められ回答するとき、対象者はテーマについての内的状態を、自分の枠組みにそって意識に上らせ組織化・構造化し表出する。したがって、研究者の枠組みが対象者の表出に与える影響を最小にとどめることができる。調査者は分析の段階においてデータを目的に適う枠組みで組織化・構造化することになる。本研究がとらえようとするのは対象者が調査時に与えられた枠組みにそって作り出す時間的態度や個人志向性・社会志向性ではなく、日常において抱えるそれらであり、対象者自身の持つ、あるいは作り出す枠組みもまた後者の反映であるとするれば、自由記述を求める方法が本研究の目的にかなう。

以上をふまえ、本研究はクロックタイムの発生としての時間的態度、促進的記号の内面化としての個人志向性・社会志向性を、就職活動との関係においてとらえることを目的とする。

2 方法

時期

200X年6月に調査を実施した。

対象者

A女子大学で心理学の専門科目を履修する4年生9名であり、全員が女性で、年齢は21歳から22歳の範囲であった。授業中に質問紙への記入を求めた。

質問紙

(1)「私にとって時間とは」で始まる文章を、いくつでも自由に記述するよう求めた。

(2)「私は」で始まり「な自分でありたい」で終わる文章を、いくつでも自由に記述するよう求めた。

(3)対象者の在籍する大学で対象者が3年生のときに配布された「就職ガイドブック」に「就職のための準備と活動の進め方」として記載された活動をリストとして示した。リストは、①自己分析、②進路登録カード提出、③資料請求、④インターネット上の就職サイト・企業サイトへのエントリー、⑤会社訪問、⑥OG訪問(既に就職している卒業生を訪問すること)、⑦合同企業セミナー・説明会への参加、⑧単独企業の企業セミナー・説明会への参加、⑨応募書類の準備、⑩採用試験の受験(筆記・面接含む)であった。リストのうち、既に行った活動に印をつけるよう求めた。他にを行った活動があれば自由記述欄に記入するよう求めた。

なお、(1)の前に投影法により時間的展望を測る質問紙であるサークルテスト(Cottle, 1967)へ、(2)と(3)の間に大学卒業後の進路についての不安の有無と理由をたずねる質問紙へ回答を求めたが、今回は分析の対象とはしない。

3 分析と結果

対象者集団の様相を視覚的に要約することを目的として分析を行った。その方法と結果について、「方法」で述べた質問紙と対応させながら以下に説明する。まず、質問紙(1)(2)の自由記述について、KJ法によるカテゴリー化を行った。カテゴリーを表1に示す。

続いて、次の変数について全対象者の01データを作成した。

(a) 時間不安: Winnubst(1988)の定義に従い、質問紙(1)において(時間とは)「追い立てるもの」とカテゴリー化された記述があれば1を、なければ0を与えた。

(b) 時間活用性: 甲村(1996)の定義に従い、質問紙(1)において(時間とは)「守らなければならないもの」「使い方を考えるべき」とカテゴリー化された記述があれば1を、なければ0を与えた。

(c) 個人志向性: 伊藤(1997)の定義に従い、質問紙(2)において「「自分を持つ」「自分を好き」(な自分でありたい)とカテゴリー化された記述があれば1を、なければ0を与えた。

(d) 社会志向性: 伊藤(1997)の定義に従い、質問紙(2)において「人に好かれる」「感謝の心を持つ」「人を助ける」「人の気持ちがわかる」「社会のルールを守る」「社会的成功」(な自分でありたい)とカテゴリー化された記述があれば1を、なければ0を与えた。

(e) 就職活動: 質問紙(3)において、リスト内の活動毎に印があれば1を、なければ0を与えた。自由記述として挙げられた活動にもそれぞれ1を与えた。

全対象者の01データを表2に示す。最後に、(a)から(e)の変数を、平方ユークリッド距離による多次元尺度法(MDS: multi-dimensional scaling)を用いて2次元空間上に布置した。MDSにはSPSS for Windowsを使用した。Stress値は.16094、RSQ値は.87679であった。2次元空間布置を図1に示す。

4 考察

本研究の目的は、クロックタイムの発生としての時間的態度、促進的記号の内面化としての個人志向性・社会志向性と、就職活動との関係をとらえることであった。図 1 は対象者 9 名の 4 年在学時 6 月における集団としての様相を、MDS によって視覚的に要約したものである。各変数は変数同士の類似度により布置されている。空間上において距離の近い変数同士は、01 データの対象者間の類似度が大きいことを意味する。

表 2 の 01 データに戻って確認すると、次元 1 においては、正の方向に行くほど該当する対象者が多く、負の方向に行くほど少ない。次元 2 においては、負から正の方向へ順番に、時間的態度、社会志向性、個人志向性が布置されている。このことから、時間的態度は個人志向性との間より社会志向性との間において類似度が大きいことになり、クロックタイムの発生は促進的記号の内面化と関係が強いことが推察される。

2 つの次元軸で区切られた空間を右上から左回りに第 1 象限、第 2 象限、第 3 象限、第 4 象限とする。図 1 に示された様相を述べると次のようになる。第 1 象限、第 4 象限、第 3 象限にわたり分布するまとまり(ア)が見られる。ここには、リストとして対象者に提示された就職活動のすべてと「大学の就職センターに相談」が含まれる。また時間的態度の「時間活用性」「時間不安」の両方が含まれる。さらに「社会志向性」がここに含まれる。第 1 象限上方にはまとまり(イ)が見られる。ここには、就職活動リストの「会社訪問」「資料請求」と「個人志向性」が含まれる。次元 1 の負の領域、第 2 象限と第 3 象限にわたり、まとまり(ウ)が見られる。ここには、自由記述として得られた就職活動のうち「大学就職センターへ相談」を除くすべてが含まれる。

これらを次のように読み取ることができる。まとまり(ア)に含まれる活動は、表 2 の 01 データに戻って確認すると、右上から左下に向かうほど該当する対象者が少ない。調査が実施された 4 年在学時の 6 月は就職活動の後半の時期であり、この時点において既に多くの対象者によって行われていた活動が右に、あまり行われていなかった活動が左に布置されることによって、右上から左下に向かって就職活動の進行順に並んだと考えられる。(ア)全体を右上から左下へ見ていくと、まず促進的記号の内面化としての社会志向性とともに就職活動がスタートし、クロックタイム発生としての時間活用性とともに就職活動が進み、やがてクロックタイムに伴う焦りとしての「時間不安」が生じる。対象者によっては「就職センターへ相談」する。このまとまりに含まれる活動は「就職センターへ相談」を除き他はすべてリストとして対象者に提示されたものであり、対象者が所持する「就職活動ガイド」に記載された、就職活動を行う学生に広く知られた手順である。したがって、(ア)は、まさに内面化された促進的記号の立ち上がりとともに就職に向かって収束していく行為を示すまとまりといえる。

次に、個人志向性を含むまとまりである(イ)を見ると、提示されたリスト内の活動である「会社訪問」「資料請求」が含まれている。このことは、自他の差異を志向する場合においても、広く知られた手順としての活動が行われたことを示す。ただし、この 2 つの活動は、あえて行わなくとも就職活動を進めることが可能であるという側面を持つ。あえてそれらを行うとき、そこには、自分にとってのより良い就職をするために特定企業の詳細な情報を得ようとする意図が伴うということであろう。そう考えると、自分ならではの進路を求める個人志向性とともに生じやすいことが理解できる。これらの活動と、時間活用性や時間不安との距離は離れており、クロックタイムの発生をともなって生じたものとは考えにくい。

まとまり(ウ)は、自由記述として挙げられた、つまり、個別に行われた活動でなりたっている。

次元1の負方向に布置し、時間的態度、個人志向性・社会志向性とは次元1上において離れている。しかし、次元1上のこの布置は、これらの活動の個別性による該当対象者の少なさによるものであり、活動の進度による該当対象者の少なさによるものではない。したがってここでは、次元1よりむしろ次元2の布置に注目すべきであろう。次元2上において、このまともりは社会志向性と同じ布置である。01 データに戻って確認すると、ここに含まれる個別の活動は、リストに提示された活動と同じ対象者によって行われており、手順としての就職活動の一環として行われていたことがわかる。これら個別の活動の中には、対象者の「やりたいこと」が含まれている。「入試のための勉強」は大学院への進学志向によるものである。「ボランティア活動」には「(福祉志望のため)」と但し書きが添えられている。これらから解釈すると、「やりたいこと」に向かう活動も、促進的記号の内面化としての社会志向性とともに行われるととらえることができる。

本研究では、時間的態度、個人志向性・社会志向性についての記述を求める際、「就職活動における」時間のとらえ方、「就職活動における」やりたい自分という形の教示を行ったわけではない。それにもかかわらず、時間的態度、個人志向性・社会志向性と就職活動との間に、これまで述べた関係が見出された。このことは、対象者の日常において促進的記号としての就職活動が立ち上がっていたこと、そしてそこにおいてやりたいことに向かう活動が同時に生じていたことが示されたといえる。

最後に、本研究の限界と課題について述べる。本研究の結果は、集団の様相についての調査であり、現時点において集団の様相を個人の様相として解釈することは難しい。今後は個別の具体的な事例を調査分析し、個人の様相においてやりたいことに向かう活動が就職活動とともに立ち上がることを確認するとともに、それらの活動がどのように進むのか、活動間にどのような作用が生じるのか、といったことを探索する必要がある。また、本研究の、9名という少数の特定集団における4年在籍時6月という特定時点の結果を広く一般化することには、慎重である必要がある。一般化のための今後のデータの蓄積を待つことになる。

さらに、方法論的な課題であるが、本研究は自由記述を分析するにあたり、カテゴリーに該当する記述の有無のみを問題とし01データに変換して扱った。本研究は用いなかったが、対象者毎の記述数も有用な情報を含むと推察される。さらに、記述が挙げられた順序も有用な情報を含むと推察される。たとえば、Kuhn & McPartland(1954)の考案したself-attitudeの測定法である20答法では、自由連想反応の生起順序を自己概念の構成の反映であるととらえ点数化を行う。本研究のデータ分析においても、反応の生起順序の持つ情報を活かすことが1つの方法として考えられる。

5 引用文献

- Cottle, T. J. (1967). The circles test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of projective techniques & personality assessment*, 31, 58-71.
- 伊藤美奈子 (1997). 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 北大路書房.
- 甲村和三 (1996). 時間に対する態度と性格 松田文子・調枝孝治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二(編著) 心理的時間 北大路書房 pp. 455-473.

Kuhn, M. H. & McPartland, T. H. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.

松浦美晴 (2009). 「やりたいこと」に基づく大学生の進路選択(1) 山陽論叢, 16, 49-52.

溝上慎一 (2004). 現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる 日本放送出版協会

サトウタツヤ (2009). 時文化 厚生 サトウタツヤ (編著) TEM ではじめる質的研究 —時間とプロセスを扱う研究をめざして— 誠信書房 pp. 185-200.

Valsiner, J. (2007). *Culture in Minds and Societies. Foundations of Cultural Psychology*. Sage.

Winnubst, J. A. M. (1988). Time anxiety and type A behavior. In I. G. Spielberger, (Eds.), *Stress and anxiety: Vol. 11*. New York; Hemisphere.

表1 自由記述のKJ法によるカテゴリー

「わたしにとって時間とは」	記述数	「わたしは～な自分でありたい」	記述数
追いたてるもの	7	自分を持つ	6
不可逆なもの	7	人を助ける	6
守らなければならないもの	6	前向き	5
時間はいつも存在する	5	笑顔	5
大切なもの	4	冷静	5
必要なもの	4	人の気持ちがわかる	4
経過の感じ方が変わるもの	3	社会のルールを守る	4
使い方を考えるべき	3	幸せ	3
何かを成す	3	きれい	3
遅く感じる時がある	2	優しい	3
感情を呼び起こすもの	2	感謝の心を持つ	3
楽しい時間	2	正直	2
時刻	2	素直	2
休息	2	今のままでいる	2
残るもの	2	自分を好き	2
解決してくれるもの	2	健康	2
考える	2	元気	2
思い通りにならない	2	人に好かれる	2
生きていること	2	損得を考えない	2
未来や夢	2	社会的成功	2
年をとるにつれて流れが速く感じるもの	1	後悔しない	1
速く感じる時がある	1	長所がたくさんあるよう	1
平等	1	ずっと音楽が大好き	1
無限大	1	ユーモアのある	1
自由	1	計画的	1
人を成長させる	1	欠点を自己分析できるよう	1
努力させてくれる	1	夢のある	1
いつ終わるか分からない	1	きゃしゃ	1
日々の糧	1	自然を愛する	1
価値あるもの	1	器用	1
今	1	仕事ができる	1
		家事全般が出来る	1

「記述数」とは全対象者の回答に記述が登場した数であり、記述した対象者の人数ではない。

表2 全対象者の01データ

変数	対象者	1	2	3	4	5	6	7	8	9
時間的態度	時間不安	1	1	1	0	1	0	0	0	1
	時間活用性	1	1	1	1	1	0	0	1	0
個人志向性・社会志向性	個人志向性	1	1	1	0	1	1	1	1	0
	社会志向性	1	1	1	1	1	1	1	0	1
就職活動リスト提示項目	自己分析	1	1	1	1	1	1	1	1	0
	進路登録カード提出	1	1	1	1	1	1	1	1	0
	資料請求	1	0	1	1	1	1	0	0	0
	インターネット上の就職サイト・企業サイトへのエントリー	1	1	1	1	1	1	0	1	1
	会社訪問	0	0	1	0	1	1	0	1	0
	合同企業セミナー・説明会への参加	1	1	1	1	1	1	0	1	1
	単独企業の企業セミナー・説明会への参加	1	1	1	1	1	0	0	1	0
	応募書類の準備	1	1	1	1	0	1	0	1	0
	採用試験の受験(筆記・面接含む)	0	1	1	1	0	0	0	1	0
	資格試験を受験した	1	0	0	0	0	0	0	0	0
就職活動自由記述	大学の就職センターへ相談	0	1	0	1	0	0	0	0	0
	入試のための勉強	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	課外活動(アピールのため)	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	社会人の友達や家族からの情報収集	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	お参り	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	施設ボランティア(福祉志望のため)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	本やインターネットの求人情報を探す	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	試験に備え勉強	0	0	0	0	0	1	0	0	0

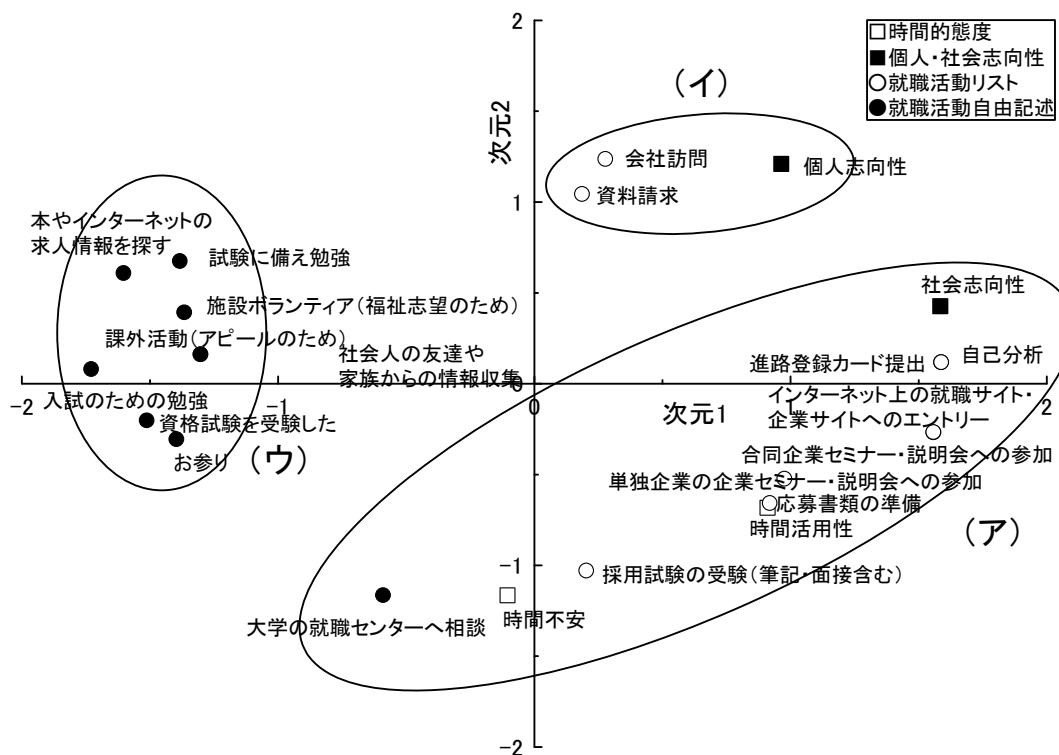


図 1 多次元尺度法による変数の 2 次元空間布置

本研究は、2006 年の日本心理学会第 70 回大会において発表したデータを再分析したものである。